

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：44306

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00860

研究課題名（和文）教員と学習者間の身体的同調を生かした音声指導法の開発

研究課題名（英文）Development of teaching pronunciation method with movement synchrony between teachers and students

研究代表者

山本 玲子 (Yamamoto, Reiko)

京都外国語短期大学・キャリア英語科・教授

研究者番号：60637031

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語学習者の発音の判明度に焦点化したものである。本研究の目的は、英語と日本語の発音の違いや英語の音と文字の関係を明示的に指導する方法を明らかにすることである。

教員と学習者の身体的同調は言語習得に必要であるとの先行研究に基づき、英語学習者と教員を対象とし、質問紙調査、インタビュー、授業観察等の調査を実施した。研究チームは2種類の教材開発を行った。英語母語話者の動画を含む発音記号指導のための教材と、歌、チャンツ、ライムを含むプロソディ指導のための教材である。実験授業の参加者のプロトコルおよびジャーナル分析からその効果が実証された。

本教材はいずれもWebサイトでダウンロード可である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の英語教育は、発音指導について現場任せとなっている実態がある。教員自身が発音が苦手であったり、発音指導法を知らなかったりという理由から発音指導を避ける傾向もある。本研究は、英語の専門家ではない小学校教員も含め、指導者が安心して発音指導ができるよう、指導者への説明も意図した懇切丁寧な教材を開発した点で、教育現場に大いに資するものとなる。何年も学校教育で英語を学習しても「英語が話せない」「聞き取れない」日本人が少なくないのは、日本語と英語の音韻体系が大きく異なるためである。発音記号を使用し明示的に音の特徴を知り国際社会で通じる判明度の高い発音習得をめざす本研究は大きな社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）： This study focuses on the intelligibility of pronunciation in EFL learners. The aim of this study is to devise explicit instruction on the difference of the two languages (Japanese and English) in the phonetic system and the relation between letters and sounds.

Based on previous research that movement synchrony between teachers and students is necessary in acquiring languages, the research for EFL learners and teachers was conducted using questionnaire, interview, and observing classes. The research team developed two kinds of teaching materials: One is for international phonetic alphabet (IPA) instruction with videos of an English native speaker, and the other is for prosody instruction with songs, chants, and rhymes. The experimental lessons with the materials proved their effects through analysis of the participants protocol and journal.

By downloading through Website, both materials are available for any teacher or learner of EFL.

研究分野：英語教育学

キーワード：音声指導 発音記号 プロソディ 身体性

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 小学校における英語教育が開始し、聞こえたままを模倣する小学生特有の身体性が発音習得に大きな利点であることが報告されていた。しかし教科化と共に中学校以降の英語学習に近い指導が主流となり、その良さが生かされなくなりつつあるのが、研究開始当初の状況であった。小学校における成果を、身体性に軸を置きつつ全校種における英語教育に展開していくことは緊急性の高い課題であった。

(2) 日本人の多くが即興的なやりとり(聞く・話す)に苦労する理由として、英語特有の発音を習得していないため文字で読める内容が音声化されると聞き取れない、また正しい英語を発しているのに発音が悪く聞き取ってもらえないことが指摘されてきた。これは大学の教員養成課程において音声学が必修ではないこと、発音指導法を知らない教員が多いことも原因である。特に、ローマ字やカタカナという利便性の高い文字が教育現場では昔から使われており、その価値を高く評価する教員がいる実態もあった。しかしそれらはいずれも、英語の発音を正しく表記する文字体系ではなく、むしろ正しい発音習得を阻害するものである。以上の背景から、日本の英語発音指導には抜本的な改革が必要であると考え、本研究を開始するに至った。

2. 研究の目的

(1) 外国語を含む言語教育の目的は、相手を理解するための心(情動)と体の感覚を総称する概念である「身体性」を育てることであると、身体性の研究を通して考察してきた。その概念を土台に、教員と学習者間に生まれる身体的同調が国際社会で通用する判明度の高い英語発音、つまり英語特有の音やリズムの体得に直結する過程を解明することを、目的の一つとする。

(2) 小学校で英語指導に当たる教員は必ずしも英語の専門性が高いとは限らない。しかし小学校では学習者の身体性を生かした指導をしてきた蓄積がある。学習者と教員の身体性を生かせる汎用的な指導法を開発し、指導者の英語の専門性に関係なくそれを可能とするために教室で実際に使用できる教材を開発することを目標とした。

3. 研究の方法

(1) 小学校・中学校・大学の教員を対象として発音指導の問題点や必要な指導を調査した。研究調査方法は以下の通りである。

質問紙調査(発音記号やカタカナの使用状況とそれに対する意見、自分自身の発音への自信・不安、希望する教材など)

学習者の発達段階に応じた身体的同調のためのタスク・教材・指導法の開発

協力校での検証授業(質問紙調査、授業観察と教員及び学習者へのインタビュー)

検証授業の評価(身体感覚や情動の動きについて、発音テスト、ビデオ映像分析、プロトコル分析)

(2) (1)の調査結果をもとに、発音指導のための効果的な教材開発を行った。開発の手順は以下の通りである。

パワーポイントのソフトを使用し、発音記号とフォニックス、特に小学校で取り扱うアルファベットジングルとの関係を明示的に説明するたたき台としての教材を作成

音声学者、英語母語話者、現職教員の意見集約のための打ち合わせを実施

特に現職教員より、英語母語話者の口元を見ながら発音練習をしたいという強い希望があったため、全面・側面より録画した動画を撮影・教材へ挿入

を通し、現職教員より身体性を生かした活動例を瞬時に検索できる文献の必要性が指摘されたため、発音指導とは別に紙の教材を作成

完成した教材を使用した実験授業を、中学校・大学で実施し、質問紙調査、インタビューを分析

実験授業の結果からさらに改良を加え、完成した教材をWebサイトにアップ

(3) (2)で開発した教材を補完するものとして、プロソディ指導のための教材を新たに開発した。チャンツや歌を用いることは、心理的な障壁を取り除いたり、記憶の定着を強化させたりする他に、日本語には見られない英語の強勢拍リズムを習得するのに効果がある。以上を念頭に新教材の開発に当たった。

学習者に強勢やイントネーションの概念についての明示的説明、体感的に明瞭な発音を習得できる練習課題として手拍子、チャンツ・歌を題材とした指導法を検討

(2)同様、英語母語話者にモデル音声の録音を依頼

完成した教材を使用した実験授業を、大学生を対象に実施し、質問紙調査、インタビューを分析

実験授業の結果からさらに改良を加え、完成した教材を Web サイトにアップ

(4) 学会発表、学会ワークショップでの発表において、Web サイト情報と共に研究成果を報告した。その成果があり、教材のダウンロード数は現在も増加中である。ダウンロードに当たっては所属先の記入を必須としたが、小学校教員から大学教員まで幅広い層が利用していることが明らかになっている。

4. 研究成果

(1) 最初に現職教員(小中高大すべての校種)を対象とした調査を実施したところ、発音記号への抵抗感がどの校種においても減じていること、むしろ発音記号指導が望まれている傾向が明らかになった。実践的な英語でのインタラクション(話すこと・やりとり)が重視される英語教育改革の中で、即興的な発話や聞き取りには正確な発音能力が欠かせないことが、現場の教員の間でも共通認識されてきたということになる。この調査結果が本研究で開発した教材の方向性を決定したと断じてよく、その後も現職教員の熱心な協力体制の中で研究が継続し、教育現場とアカデミアをつなぐ実践が数年にわたり継続したこと自体が一つの成果である。発音記号はあくまで小学校教員が習得することが目的で、小学生に発音記号指導をすることは視野にない立場の研究であるにもかかわらず、この教材さえあれば小学生にも指導は可能なので研究協力をしたいと申し出てくれた小学校教員もあり、本研究の将来的な展開はまだ無限にあることが示された。

(2) (1)の一環として生まれた共同研究もあった。身体的同調を喚起するための外国語活動をイラストで可視化するための図鑑編纂である。ミッシングゲームや消しゴム取りゲームなど、小学校英語の開始とともに知られるようになった活動は多々あるが、教員によって用語の定義が恣意的で、特に新任教員にとっては理解困難な状況も生まれている。ゲームの目的を理解せず実施しているケースも少なくなく、そのため目的が達せられず「楽しければ良い」とゲームありきになっている実態があった。執筆に当たってはイラストを効果的に使用することで、生徒のみならず教員にとっても動き方のイメージ化が促進されることを意図した。活動の目的を明記したインデントを付記した『アクティビティ図鑑』(山本玲子・吉田真生、京都外国語大学国際言語平和研究所)を出版するに至った。研修会や学会を通し図鑑を配布することで、その成果を学校現場に還元することもできた。学会に参加しておられた文部科学省視学官からも「本来公的な組織が作成すべき価値のある資料で、ぜひ教育現場に浸透させてほしい」との言葉をいただいた。

(3) 開発した発音記号指導のための教材の効果を京都・大阪・兵庫の3つの大学の授業において検証した。統制群・対照群を設定できる状況ではないため、本教材を使用するかしないかの比較はできなかったが、本教材を使用した発音指導における発音記号の習得が確認された。またアンケート、毎時間のジャーナル記述を質的分析の対象とし、KJ法やクラスター分析を通しキーワードを抽出する作業を行った。その結果、学びに向かう力の育成、自律学習者としての成長といった、学習者の内面の向上に直結したことが確認された。その理由として、発音記号を習得することは、自己流で覚えていた発音を正確にとらえ直すだけでなく、常に正しい発音を確認するという学習態度の向上にもつながるためである、と分析した。

発音記号指導における教育的示唆は以下の通りである。

発音記号を使用した発音指導は、特に発音に自信のない小学校教員の発音の判明度に効果がある。

小学校教員が発音記号を習得し、中学校以降の学習を視野に入れフォニックス指導が発音記号に直結する意識をもって指導に当たること、小中連携が促進される。

発音記号の習得は外国語の自律的学習者となるために必要である。

大学の教員養成課程で発音記号を指導することが望ましい。

(4) プロソディ指導のための教材開発では、題材の選択と効果的指導法の開発が中心となった。英語母語話者と討議を重ね共通理解を重視して進めたところ、チャンツのアクセント位置など微妙な調整の必要が生じたものの、概ね教材の意図を理解してもらい発音に反映させることができた。一方、イントネーションでは、通常の日常会話では感情の含みなど意図しながら発話しているわけではないので上昇調下降調のニュアンスを伝える困難が生じた。英語の強勢拍リズムについては、自然な発話では等時性が必然的に起こるとは限らず、チャンツや歌などを教材とするためには、歌詞に工夫や調整の必要性が明らかになった。また、イントネーションについては、学習者には、基本の型を理解させた上で、感情を表現するのに様々なバリエーションがあることを押さえる必要性が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 MASAKI Katsuhiko, YAMAMOTO Reiko, SATOI Hisaki	4. 巻 20
2. 論文標題 Phonetic Symbol Instruction with Self-made Material: A Study Involving with Elementary School Teacher Trainees	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 LET関西支部研究収録	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山本玲子	4. 巻 6
2. 論文標題 今こそ英語教育に身体性が必要とされる理由：教育現場からの提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 KELESジャーナル	6. 最初と最後の頁 31-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Yamamoto	4. 巻 93
2. 論文標題 Linguistic Proficiency Acquired by Students Through Learning Two Languages	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究論叢	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Yamamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 How children synchronize with their teacher: Evidence from a real-world elementary school classroom	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Intrenational Research Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Yamamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 Emotional synchrony of the narrator and readers in Vilette	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 International Conference of Humanities, Social Sciences and Education	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Yamamoto	4. 巻 -
2. 論文標題 The role of teacher-student relationships to cause synchrony in EFL class	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of Langakawi International Multidisciplinary Academic Conference	6. 最初と最後の頁 280-285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Reiko Yamamoto	4. 巻 12(9)
2. 論文標題 The effect of realizing emotional synchrony with teachers or peers on children's linguistic proficiency	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 International Scholarly and Scientific Research & Innovation	6. 最初と最後の頁 1153-1156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 6件)

1. 発表者名 山本玲子
2. 発表標題 発音記号教材のオンライン授業における効果 大学生の反応分析
3. 学会等名 The JACET 60th Commemorative International Convention (Online, 2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 真崎克彦・山本玲子
2. 発表標題 小学校教員養成課程の大学生を対象とした発音教材の調査
3. 学会等名 小学校英語教育学会岐阜大会online
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 真崎克彦
2. 発表標題 小学校教員を対象とした発音教材作成
3. 学会等名 英語発音教育研究部会第80回研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 真崎克彦
2. 発表標題 動画を用いた英語教材の自作についての考察
3. 学会等名 早期英語教育研究部会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Reiko Yamamoto
2. 発表標題 How children synchronize with their teacher: Evidence from a real-world elementary school classroom
3. 学会等名 International Research Conference in Prague（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Reiko Yamamoto
2. 発表標題 Emotional synchrony of the narrator and readers in Villette
3. 学会等名 International Conference on Humanities, Social Sciences and Education (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Reiko Yamamoto
2. 発表標題 The role of teacher-student relationships to cause synchrony in EFL class
3. 学会等名 Langkawi International Multidisciplinary Academic Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本玲子・里井久輝・真崎克彦
2. 発表標題 音声学を履修していない教員の発音指導力向上に、発音記号はどのように貢献できるか
3. 学会等名 LET関西支部春季研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本玲子・池本淳子
2. 発表標題 「LとRとラリルレロ」の明示的指導の効果
3. 学会等名 小学校英語教育学会北海道大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 真崎克彦
2. 発表標題 小学校教員を対象とした発音教材作成
3. 学会等名 英語発音教育研究部会第80回研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Reiko Yamamoto
2. 発表標題 The effect of realizing emotional synchrony with teachers or peers on children's linguistic proficiency
3. 学会等名 The 20th International Research Conference on Childhood Educatoin（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本玲子
2. 発表標題 新学習指導要領「話すこと～やりとり～」につながる教育活動と子どもの学び
3. 学会等名 京都府教育員会指定校相楽台小学校研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mutsumi Kondo, Takayuki Nozawa, Hyeonjeong Jeong, Shigeyuki Ikeda, Reiko Yamamoto, Yasushige Ishikawa and Ryuta Kawashima
2. 発表標題 Flow Experience during Group Work in the Japanese EFL Classroom: An Ultrasmall NIRS Study
3. 学会等名 The American Association for Applied Linguistics 2019（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 山本玲子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 現代図書	5. 総ページ数 145
3. 書名 共感力と情動：外国語教育がめざすもの	

1. 著者名 山本玲子・田縁眞弓	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 160
3. 書名 小学校英語 だれでもできる英語の音と文字の指導	

1. 著者名 山本玲子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 青山社	5. 総ページ数 300
3. 書名 身体論と英語教育 子どもの心とからだを動かす英語の授業改訂版	

1. 著者名 鈴木寿一・門田修平・梶浦眞由美・里井久輝・菅井康祐・高田哲朗・竹下厚志・松井孝彦・溝畑保之・山本玲子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 391
3. 書名 英語リスニング指導ハンドブック	

1. 著者名 山本玲子・吉田真生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 京都外国語大学国際言語平和研究所	5. 総ページ数 43
3. 書名 小学校外国語アクティビティ図鑑	

〔産業財産権〕

〔その他〕

科研費成果報告Webサイト 教員と学習者の身体的同調を生かした英語教育 https://teaching.main.jp/index.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	里井 久輝 (Satoi Hisaki) (70388643)	龍谷大学・理工学部・教授 (34316)	
研究分担者	真崎 克彦 (Masaki Katsuhiko) (60845212)	神戸親和女子大学・教育学部・教授 (34514)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------